

釣れ釣れなるままに

2013年思い出の釣行記 PART. 11

鹿島釣狂

余市川のヤマメ

岩見沢釣遊会創立50周年記念祝賀会がホテルサンプラザで開催された。往年の名手達が集い、50年の歴史を振り返りながら釣りの話に花が咲いた。最近ではゴロやコマセを駆使して岩場の先端で昆布の中に打ち込むような釣りスタイルに変わってきたが、設立当初は砂浜でカレイを狙った大会が主流で遠投派が活躍していたという。また、臨時のアナゴ釣り大会なども催され、その頃はタカノハも結構釣れたのだともいう。私は会長と次の日にヤマメ釣りを予定していたので2次会後は引き上げたが、名残を惜しんだ参加者達は遅くまで歓楽街で絆を深めあったらしい。

8月4日、6時出発の予定なのだが、4時頃早々と目が覚めてしまった。もう一眠りしようと思うのだが眠れない。準備はもう整えてあるが、布団から這い出して再確認することになった。予定どおり前野氏を案内役にして出発した。なにせ私は余市川が初めてなのである。ここしばらく晴天の日が続いて渇水気味のため、沢は諦めて本流を攻めることにした。

中流域に架かる橋の上で車を止めて様子を伺う。下流に1人、上流に1人の釣り人が見えたが、準備を整えて下りていった。橋のすぐ下のチャラ瀬で竿を出したが反応がないので、すぐに上流へと向かった。いい淵があったのでそこでしばらく粘ると、新子がほとんどで15cm程のヤマメが最大だった。

前野氏が追いついてくるのを待たがいつまでたってもやってこない。あいにく携帯はつながらない。仕方がないので一度前野氏に確認すべく橋の下に戻ると、最初に入ったチャラ瀬で釣り続けていた。新子が釣れるのでという。11時に再度この橋のところで落ち合うことにして、上流へと向かった。大きな堰堤があり、新子が竿を揺らした。全部で20匹ほど釣っただろうか。しかし、日が高くなるにつれて全くアタリが出なくなってきたので川から上がることにした。

昼食を取り次の作戦を練る。更に上流の大場が続く橋の付近で竿を振ることにした。橋の下に先客が3人いた。前野氏はその仲間に加わってチャラ瀬でやり出した。私は上流へと向かった。いい淵があるのだが何も出ない。更に上流へと向かい、川が大きく曲がったところで釣り人が5名見えた。そこはパークゴルフ場を抱えた公園となっており、駐車がしやすく釣り人も入りやすいようだ。諦めて下流へと向かう。前野氏がやはり最初に入ったチャラ瀬付近で釣り続けていた。どうも、この時期はチャラ瀬にヤマメが居着きやすい

ようだ。そう言えば、私が好んで入った淵には釣り人がおらず、皆、チャラ瀬で竿を出していたのだ。かなり下流にまで歩いて竿を振る。やはり淵にはヤマメがおらず、その淵に注ぐ早瀬の中で新子が出た。

私は溪流釣りでは淵に注ぐ瀬尻に好んで入っていたが、この時期はチャラ瀬を丹念に探っていく釣りをしなければならないらしい。



私の釣果 1.5 cm以下 26匹



私の2倍ほどを釣った前野氏

菱中造船所前

8月22日、今日は苫小牧港菱中造船所前に入ってみよう。現在は菱中造船所の建物が取り壊されているため、枕詞に旧という呼び名を付けるのが相応しいと思われるが、座布団級のクロガシラ釣りでは室蘭港南防波堤や西埠頭に並ぶ有名釣り場である。そのため時期になるとひどく混雑し、状況が分からない者が行っても戸惑うだけであると聞いていたので入釣を控えざるを得なかった。しかし、今日は平日でしかもアナゴはまだまだハシリで、新聞情報では0~1としか出ていないので竿を出せる隙間はありそうだ。兎に角、様子を見に行ってみることにした。

現地に着いてみるとどうも様子が違っている。1本入り口を間違えてしまって白灯台に着いてしまったらしい。ここにも釣り人がいたので状況を聞いてみると、顔を赤くした御仁から「絶好調だ」と返された。確かに4名の釣り人集団は焼き肉にお酒が入り、お喋りが絶好調のようであった。釣りものはいまだ無いらしい。そのお喋りにお付き合いしていると、港内に出していたサビキ仕掛けの竿が小刻みに震え出した。相方が「引いてるぞ」

と知らせてもお喋りに夢中な竿の持ち主は、腰を上げようとはしない。そのうちにその小さなアタリもなくなってしまった。菱中造船所はどのように行くのかを聞いてみた。すると、目の前の防波堤を指さしながら、「あそこは釣り会の人間や玄人が集まる場所で、ワシ等みたいな素人が行くところではない。混み合った中で遠慮しながら竿を出すよりも気の置ける仲間とワイワイやった方がよい。あんたも初めてのようだから難しいと思うよ」と話してくれた。指差された防波堤はぎっしりとテトラで埋まっているが、その先端はテトラが無く釣り人も見えないのでそちらに向かうことにした。

すると、高校生らしき3名の釣り人が上半身裸でやってきた。それぞれ、ルアー竿の先にサビキ仕掛けやブラー、ワームを付けている。何となく暇なのでただ竿を出しているという風情なのだ。先の白灯台付近はがら空きなのだが、そこまでは歩きたくないらしい。

目指した菱中造船所前の防波堤に着いてみると、釣り道具や寝具を積んだ大きなワンボックスカーの横でこれも裸になった釣り人がいた。港の作業員らしきお方とお喋りに夢中になっており、挨拶を交わしたがなかなかその会話の中に入っていくことが出来ない。ようやく聞き出せたことは、一昨日からここでアナゴを狙っていたが昨日1本釣れたのみで、入れ代わり立ち代わり何人か訪れたが誰も釣っていないということだった。

作業船の邪魔にならない防波堤の一番端に駐車してから、そこに付いた階段から上がって釣り場を見学した。すると、テトラとテトラの間に丸太や角材を渡して20cm間隔程の竿受け部分が削ってある。それが何本も設置されているのだ。いったいこの狭い範囲に何本の竿を立てているのだろ。クロガシラの盛期の混雑ぶりが伺えた。さらにテトラの前に出ていくことが出来るようにとテトラの隙間に板切れで渡り廊下を作り、その先には大きなコンパネを敷いてステージを作って、魚を取り込みやすいようにしてあった。



渡り廊下が設置してあった



竿受けには20cm間隔で彫り込みが入っていた



防波堤の先端に車を横付けしてから竿を設置する

先ほどのワンボックスカーの釣り人に、この竿立てやステージを利用しても差し支えないかどうかを尋ねると、釣り人としてのルールを守ってさえくれれば大丈夫だと教えられた。さらに、竿を先に出したから自分の釣り場だと錯覚しないで、お互いに譲り合いながら使っているのだよと念を押された。私は、暗くなってからのアナゴ釣りでは足元に不安が残るので、テトラの埋まっていない防波堤の先端で竿を設置することにした。

隣に釣り人が入って、テトラの隙間からソフトルアーを飛ばしている。ソイを狙っているのだろうか。その後、アナゴ狙いの釣り人が予め設置してある丸太の竿受けに竿を置いた。更にもう一人と続く。裸になっていた先着の釣り人もTシャツを着こんで竿を出し始めた。

風がやんだ。雲に隠れていた太陽も西に沈んだようだ。いかにもアナゴが釣れそうな雰囲気周辺に漂いだした。アタリだ。しかし、小気味よく出たアタリの主は思った通り30cmほどのアブラコだったのでリリースすることになった。その仕掛けを再度遠投して糸ふけを取っている最中にフワフワと竿を押さえ込むようなアタリが出た。リールを巻くのをやめて様子を伺うとグググッと竿先が入った。素早く合わせると魚に乗った。スーと軽くなったりグーと重くなったりのアナゴ独特の引き込みである。上がってきたのは今年初物になる40cm程のアナゴだった。今日はなんだかもっともっと釣れそうな気がする。



今年の初アナゴ

しばらくヒトデと格闘していると、例のフワフワとするアタリが出た。少し道糸を送り出してから竿を手を持つと道糸がヒューンと張り詰めて竿先がグックと引き込まれた。乗った。先ほどのモノとはひと味違う大モノだ。大モノの感触を楽しみながらゆっくりとリールを巻いていると、アナゴの引きとは違う力が働いた。隣の釣り人が梯子を駆け登っていくのが見えた。何と隣の道糸と絡んでしまったのだ。一瞬リールを巻くの躊躇したが大アナゴが付いているという思いで更に力強く巻いた。アナゴが海面から頭を出しバシャバシャと跳ね上がった。そして隣の道糸を滑り上がって行く途中で大アナゴが落ちてしまった。

痛恨のバラシだ。隣の釣り人が申し訳ないと謝ったが、実は私が悪いのだ。魚のアタリが出だしてから潮が大きく動くように感じていたが、その引き潮に乗って私の錘が隣りの方へと流されていたのだ。私は25号錘を使っていた。隣は潮に負けないようにと30号の錘を使っていた。そしてここでは30号が平均的だと教えられていたのだ。苫小牧港の奥の方では25号で潮に流さることはなかったのだが、この場所は港の出口に近い所で潮の影響を受けやすかったのだ。釣り人が設置したステージを使うことはないと思っていたが、それに上がって道糸に絡んだ下バリを外し私の方が謝ることとなった。

30号錘は用意していなかったので、今度は竿を2本として左方向へと遠投し正面に来たところでサビキながら仕掛けを回収した。その回収時に今度は根掛かりしてしまった。根があるとは思えないので、じっくりと引くと、今度はゴチャゴチャに絡まった仕掛けと

それにくっついたホタテが上がってきた。その絡まりには2種類の仕掛けと2個の錘が付いていた。その錘はどちらも隣人が言うここでの平均的な錘サイズの30号だった。

午後10時の最干潮時になり釣り人もほぼいなくなったので、私も菱中造船所前を引き上げることにした。今日の釣りで少し自信が付いた。今度は4月や5月の平日にクロガシラ狙いでここに来てみることにしよう。

またまた菱中造船所前

9月7日に釣遊会の役員会を開いて、創立50周年記念大会と祝賀会の事業報告をして承認された。その場で、前野会長が携帯を開いた。そこに写し出されていたのは、1本のアナゴとほぼ同寸のクロガシラだった。45cmほどあろうか。前野氏は小物だと言うが、アナゴはともかくクロガシラはこの時期としては最大級のものになるだろう。釣り場は苫小牧西港で、彼の付近でもアナゴがポツポツと上がっていたという。

9月8日、同行の約束を取り付けるが、あいにく苫小牧は荒れ模様で断念することになった。天気の回復を待って9日、私一人で苫小牧港に向かった。最近釣果が上がっているという晴見埠頭の入口を見逃してしまい、南埠頭に立ち寄ってみるが外国船入港のため立ち入り禁止の措置がとられていた。それで先日初めて入った菱中造船所前へと向かった。

防波堤の先端では2名の若い釣り人がチカ釣りをしていた。投げ釣りをしていたが一度もアタリがない上に、防波堤周りにチカが群れていたのでもマキエと仕掛けを釣り道具屋で買い求めて釣り始めたというのだ。3号のサビキを上下させていると、小型のチカがほよいテンポで釣れ続いて50匹ばかりをクーラーに入れて持ち帰った。

私はカレイ仕掛けとアナゴ仕掛けを準備してから4号サビキがあったので同じように上下させてみた。アナゴの保険にソイでもと虫のいいことを考え、その生きエサとして活用しようと考えたからである。群れがどこかへ行ってしまいうまにポツポツと10匹ばかり釣れたので生きたままハリに刺して防波堤の縁に放り込んでみた。チカの口から上顎や下顎に刺したり、背びれ付近や尾の部分に刺したりしてみたが、仕掛けを回収したときにはどれも絶命していてその効用の程は分からず仕舞いだった。

辺りが薄暗くなった頃、前回ここでご一緒した地元の釣り人がきた。そして、その仲間が5名ほど集まってきてテトラの後ろに陣取ってアナゴ釣りを始めた。釣果は50cm~60cmのものを一人1~2本と前回よりは少しよくなってきたようだった。私はヒトデに悩まされたが引き上げる寸前に50cm程のものを1本だけ手にすることが出来た。

地元の人に様々なことを教えていただいた。アナゴは1回目のアタリで合わせてもまず乗ることはなく、食い逃げされるのが落ちだ。アタリがあつたら静かに道糸を張り次のアタリで合わせると比較的バレが少ない。ルミコのような集魚光はヒトデを寄せることになりアナゴの警戒感を増してしまうので使用せず、夜光玉を付けたとしても極小のモノを付けている。天秤の下バリはヒトデ対策のために浮き球をつけているが、ギラギラと光るモノではなく、ほの暗く光を放つモノの方がよい。ハリはタラ針7号にするとバレが少ない。

最近ではイカに食いつきがよいようだ。イソメは化学調味料と塩で締める。その割合は、私は6対4だが、隣の仲間は3対7でその人の好みによってまちまちだ。車の中に放置していても1週間ばかりは保つ。冷蔵庫で保管すると1ヶ月は保つだろう。ヒトデが付いたエサにはまず食いつかないと考えてエサを取り替えている。クロガシラの盛期には20cm間隔で竿が並ぶので、みんな道糸や錘を統一している。振り込んでから糸ふけを取った後、道糸が交差している場合は他の人の竿を動かして調整している。

こんなところだろうか。この次は、この地元の釣り人を真似てみようと思う。